



平成8年7月3日

原爆惨状絵図 ㊦1号

「あら……………内光だ」

長崎県被爆者手帳友の会
会長 深塚 勝一

「㊦1号絵図」

この画面は、昭和20年8月9日 午前11時頃、私が三菱大橋工場、
㊦一仕上工場、山口 辰美組において、魚雷の水圧試験をしていたときの
ことでした。ピカッ!と上空に光るものがあった。

それは、電車がスパークしたときのようにでしたが、その規模がはるかに
大きく、色は赤味が濃く、アラッ……と上空を見上げたときの画面でした。

この地点は、A・B・C・C原爆被害調査委員会の調べでは、爆心地からの
距離1374米とのことでした。それから時間にして、0.5秒して、私の
身体が10米ばかり吹き飛ばされたのでした。

私は内光を見て、「アラッ! 大変だ!」身をかかさればと思って、周囲を
見渡したが、かくれるところがなかったことを今もよく記憶しています。

◎ 絵図作成者

- 当時の住所 長崎市本薬町 XXXXXXXXXX ○ 氏名 ^{ながはら かつひら} 深塚 勝一
- 身 分 長崎商業報国隊 ○ 生年月日 昭和3年1月12日
- 家族の安否 母、深塚 とも、姉、深塚 光枝、弟、深塚 博
当時(42才) 当時(19才) 当時(11才)
即死 即死 即死

◎ 本人の被爆負傷の状況

右身に負傷、頭部、首、右手、右足の部位、被爆後、西町防空壕にのり、
朝鮮人のリヤカーに乗せられて、救護列車㊦3号(午後、7時出発)に收容され、
大村病院に入院、昭和20年9月30日まで退院するまで治療を受けた。



顔面の負傷の箇所にはキズを以て 血だらけとあって
逃げまどう 産院を襲撃した学校の校舎が

原爆惨状絵図 ㊦2号

「顔面を負傷して、逃げまどう女子挺身隊」

この場面は、原爆投下から10分ばかりだったときのことでした。

時間にしたら、昭和20年8月9日午前11時10分から15分までのとき
と思います。被爆場所は、三菱兵器大橋工場、第一仕上工場中嶋組です。
中嶋組は、仕上工場の平面から1.5米ばかり掘り込んでいたところの
仕上工場でした。画面の少女は、鹿児島県実践女学校のNさんと言う
色の浅黒いクルクルとした可愛い少女でした。

私（現在、会長 深塚 勝一）が「キマッー！」と言う悲鳴を肉いて、振り
かえって見たところ、私より7米ばかり後方で、顔面に手を当て、鮮血が
ボタボタ飛び散っておりました。

私は、その後、このNさんが生きていたろうかと、来じておりました。

ところが、被爆から50年後の平成7年10月30日、元・鹿児島県女子
興業学校の女子挺身隊16名が、被爆地長崎を訪ねて来られ、平和公園
三菱兵器製作所に足を歩み、爆死した同僚2名の足跡を再確認されました。

岡本米子さんが女子挺身隊の隊長で、長崎の兵器工場に出動を
いやがる人達を説得して、36名が長崎に来られました。

それで、いつまでも亡くなった2名のことが気になって50年後の平和公園の
「長崎の鐘」をたきながら、これでマッと責任を全うしたと云って泣いて
おられた。その際、実践女学校のNさんのことを肉いたところ、団員の
1人が、Nさんの死亡を8月10日の翌日、私がみたところから5.6米
先で、死んでいるのを発見したそうです。

◎ 後日談（被爆惨状絵図 ㊦2号）

この画面の女子挺身隊員は、色が黒いので、私ども、
男の勤労学徒の皆さんから「黒ちゃん」と呼ばれて
おりました。それは色の黒いがくるくるとして変きょうが
あり、皆さんに可愛がられておりました。

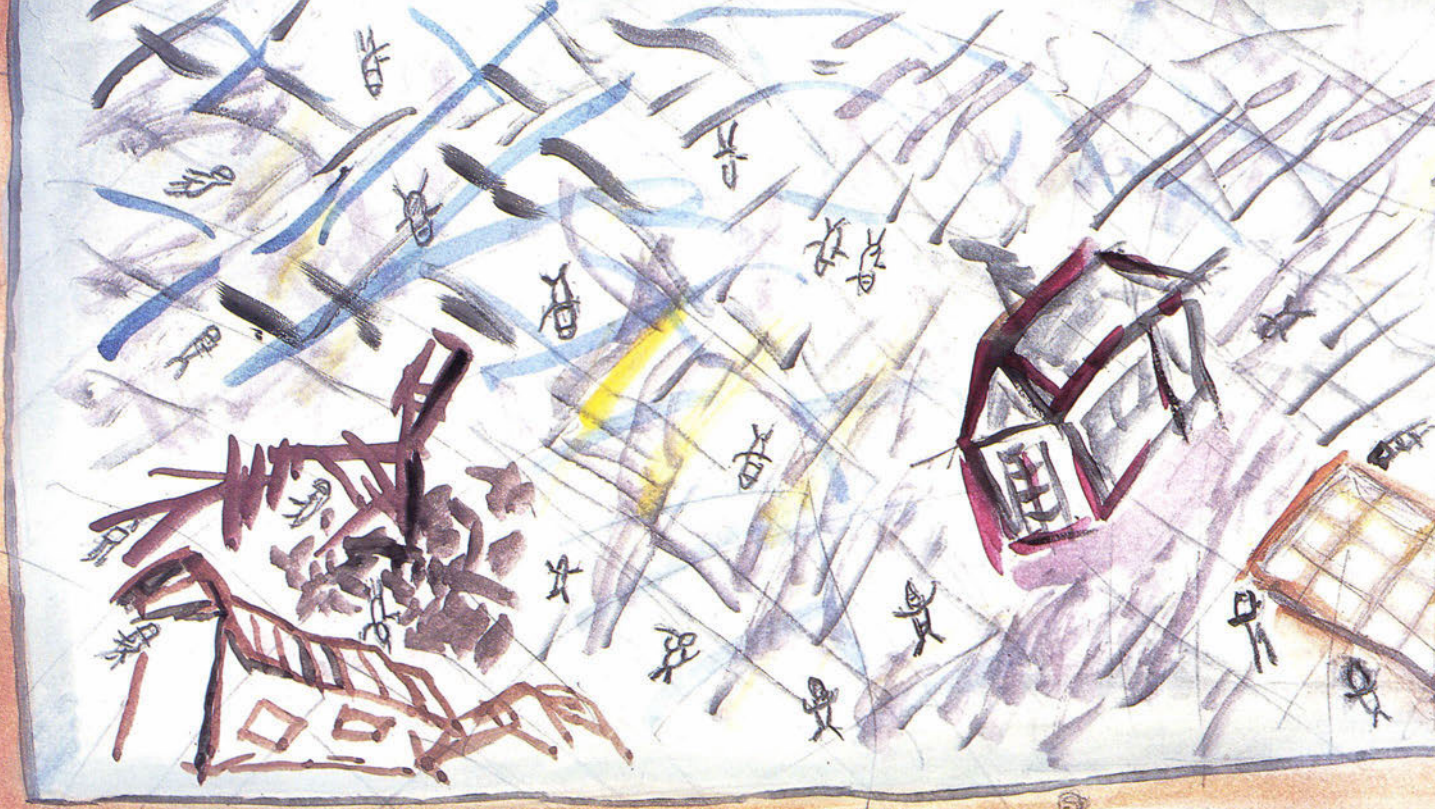
そのときは、女子挺身隊として、一年間真面目に働いた
場合1ヶ月の休暇があったのでした。

この休暇を利用して、黒ちゃんは、8月のはじめから、鹿児島
の実家に帰っていたのでした。

ところが、8月9日（原爆投下の日）の朝、ひっそり取場に
戻って来ておりました。

聞くところによると、家に帰ってからもう退屈したので
長崎の取場に友達を訪ねて来たとのことでした。

私は、あのときの光景で「馬鹿が、あの黒ちゃんも帰って
来なければ、負傷せんでよかつたのに」ときどき黒ちゃんのことを思い
出してはつがやいていました。



原爆惨状絵図 オ3号

「三菱兵器大橋工場オ三門に殺到した負傷者達」

大橋工場に門が三ヶ所ありました。

オ一門が社員ならびに来賓者の通用門でした。

オ二門が工員ならびに勤員学徒の通用門でした。

オ三門 女子従業員ならびに女子挺身隊 女子勤員学徒の通用門でした。

この場面は、三菱兵器大橋工場には、7000名近くの従業員ならびに女子挺身隊勤員学徒が、昭和20年8月9日午前11時頃に勤務していたと思われる。あとの3000名近くは、夜勤勤務者トンネル工場の従業員などと思われます。

原爆投下後 このオ三門は一番多数の人々が、このオ三門を 通って西町方面へと逃げたものと思います。

それは何故か？ オ三門を出ると、国鉄があったからだと思います。

恐らく このオ三門から 4000名の人々が逃げたと思います。

この場面は、原爆投下から10分後、即ち、昭和20年8月9日、午前11時10分前後だと思えます。

負傷者達は、血だらけとなって、友達に助けを求めながら、あたかも、東京ドームに殺到する群衆のようなものでした、私もその一人でした。

◎証言者、 深堀 勝一(68歳)
長崎市 坂本 [REDACTED]
長崎県被爆者手帳友の会会長



原爆惨状絵図 ㊦4号

「救援列車3号車」

この画面は、昭和20年8月9日午後6時半頃の場面で、長崎市西町照円寺の××北の100米ばかりの地点の救援のために停車した救援列車3号車でした。機関車を逆にして、道の尾駅方面からゆっくりゆっくり南下したもので、鉄道線路には、負傷車が横たわっていたので2人の機関車の乗務員が旗をかりつつ、下って来たものでした。

そこには、数百名に及び負傷者など待たしておりました。

重傷者のみ列車に乗せよと指令が出て、警防団、軍人、軍醫、鉄道員が負傷者と抱きかかえて、列車に乗せ、又、列車の方から手を引きあげて救援列車に乗せられました。

この列車は、数両の客車でしたので、負傷者は200名ばかりが乗ったと思います。北に向って出発したのが午後7時頃で薄暗くなって行くところでした。列車は諫早駅で止って軽傷者をおろし、終点の大村駅に、午後9時30分頃着きました。

この㊦3号車に深堀 勝一、又、奄美大島の新納サチ子も乗車しておりました。

なお、救援列車㊦1号(石原公明)午後2時頃出発六地藏前附近から出発

㊦	㊦2号(高沢正志)	、	4	、	、	、
㊦	㊦3号(深堀 勝一)	、	6時30分	、	、	、
㊦	㊦4号(大平 力男)	、	9時	、	道の尾駅	出発



原爆惨状絵図 才5号

「原爆投下後3時間 F6Fの偵察は？」

この画面は私が、西町の防空壕にいたときのことでした。

壕の中には、20名前後の人が身をひそめていたときの事でした。午後2時頃だったと思います。突如、稲佐虫の上空から急降下して、地上から100米半ばかりのところまで低空飛行して偵察飛行した。グラマン/F6Fがあった。

防空壕の出口にいた私と真正面に向い合ったのでした。20名前後の飛行士の顔まではっきり見ることができたのでした。

私は思わず“この野郎！”と云ったようでした。

ところがF6Fは米海軍の艦上戦闘機でしたので、五島近海に、米国の航空母艦に来ていたと思われます。

アメリカがいかに長崎原爆投下を大作戦にしていたかを推測できると、思います。

なお、この飛行機を元果議の高決正志さんは、私のところから100米ばかり離れたところの小川で見たと云っておりました。

又、救援列車才1号車に乗っていた石原公明さんも、知っており、両名とも午後2時頃だったと云っております。

証言者

深塚 勝一

長崎市 坂本

石原 公明

西彼杉郎 西彼町 下岳郷

故・高決 正志

長崎市 蚊焼町



道の辰駒

No.

原爆惨状絵図 ㉔号

「絶対に戦争はしていけない！
救援列車 道の尾駅を通り過ぎるとき」

この画面は、私が救援列車㉔号車に收容されたときが、6時50分頃
で、道の尾駅の切り通しを通過するときが7時20分前後だと思ひます。

あの7米ばかりの切り通しの上に目をむけると、あの土手に這いつくばつて
救援列車をのぞきこんでいる人がぎっしりいた。その数字は、100人前後の
人だつたと思ひます。

薄暗くなつて行く車中から、私はあーあ戦争は負けたなあ……………
あの長崎の光景を見て、戦争は絶対にしてはいけない、どんなことが
あつても、決意したのでした。

この救援列車は何処に行くあてもなく、ただ、長崎市を逃れることで
精一杯の救援列車、これより以上、不安なことはなかつたのでした。

この思ひが、私が40年間、平和運動、被爆者運動を推進した原点
でした。

◎証言者 深 堀 勝 一 (68歳)

長崎市 坂本

長崎県被爆者手帳返の会長



被爆惨状絵図オ7号

「あゝここが爆心地だ」

私は、私の家が 長崎市 松山町 170番地でした。

そのために、私が 田舎の家である 西彼杵郡 三和町 蚊焼の家に 食糧品など 求める用件があって、昭和20年8月9日は、勤務先である 三菱兵器大橋工場鋼板工場を休暇をもらって休んでおりました。

午前11時頃 江川の変電所の方に ピカッ!……と いなずまがしたので、アラッ 江川の変電所が やられたばいと思った。

そこで、蚊焼の港に 川南工業の通勤船が夕方午後5時半頃に着く舟の 渡り舟に乗って 香焼島につき、そこから単関系の舟が出るのについで 長崎港の文浦海岸の方に上陸しました。

それから 五島町の 三階建の木造の建築物のところに単関系のつめ所があって、そこに私の家族が松山町にあるからそこに行くからと云って許可をもらい 長崎駅をこえ、浦上駅を通過して 決口町附近まで来ると 道が歩きやすくなったのでした。

それは、原爆投下の中心地近くになると、上から押えられて、建物が横倒しになっていないからだとあとから判ったのでした。

松山町のわが家まで来ても 全体が互れさとなっているため、探すことができなかった。

私が 松山町の家についたのが 昭和20年8月9日午後10時頃だったと思います。

街全体が 焼け野原となっていたため、うす暗く、人の子ひとり、又、猫の子一匹いない無人の里でした。

夜中の午前1時頃だったと思います。敵機が、私の近くを 機銃掃射して、去って行きました。

それからしばらくしてから子供の声で お母さん、お母さんと泣く声がありました。

翌朝 明るくなってけると、机が三つ並んだところに、手前に郵便局長さんの奥さんつぎに 私の妹 ヨシ子と、事務員の野母の岩永さんが骨となっていました。

ところが、その骨が 全然動かなかつたとき、机の位置の前にそのまま骨となっており、全然動いた形跡がなかった。その骨たるや さらさらしており、全く不思議のものでした。

又、二階においてあった、大金庫がそのまま地上に落ちていた。

それで、私は、ここが正しく爆心地であると思いました。

◎ 被爆した当時の住所

長崎市 松山町

○ 当時の身分

三菱兵器大橋工場鋼板工場の従業員

○ 氏名 島田 運

○ 生年月日 大正13年3月17日

○ 現在の住所 西彼杵郡 三和町 蚊焼

城山小学校

浦上川



原爆惨状絵図ナ8号

「 救援隊員に間違えられて 」

この画面は、昭和20年8月10日午前6時前のことでした。

私が、爆心地である、長崎市松山町170番地、松山郵便局の我が家に一晩中ねむりもせず、通夜をしたようなものでした。夜が明けたので、松山町の十字路のところに出てみると、あちこちからボロボロとなった負傷者が私のところに寄りそってきて、助けてくれと哀願するのです。

その数は、数十名にも達する人負で、私もこの負傷者にとり囲まれて、どうしてよいかさっぱり判らなかつた。

よくよくみると、皮肉が焼けただれて袖のようにがらさがったり、眼球も飛び出しているような姿であり、この在のもでないと云った姿でした。

私は逃げるようにして、この場を去ったのでした。

証言者

島田 運

長崎市松山町 XXXXXXXXXX (被爆当時の住所)

(大正13年3月13日生)

・ 現在の住所

西彼杵郡三和町蚊焼



原子の炎の中に な お 生 きて

被爆当時興立高女報国隊員

現住所 長崎市油木町

土 岐 恵美子

川姓(山 川)

昭和四十五年七月の或る日、私は

城山小学校の、校庭の隅にある小さな防空壕の前に立った。

今その入口は、こげむして名も無き草花が咲き乱れていた。二十五年前のあの日、どれ程多くの生命が、ここで息絶えたことか。

三つの防空壕の入口は、赤いレンガのへいによって、ふさがれ、それぞれのレンガには「平和」の文字が刻まれている。

中央の壕の前には、平和の慰霊塔が立っていた。

思わず、手を合わせ臉を閉じると、「今」の様に、記憶がよみがえる。親しかった友よ、人々よ、今わたしは生きてここにいるのに……………。

昭和二十年八月九日、私は、いつもの様に六時半に家を出て、城山小学校に向かった。

船も通っていたけれど、空襲で敵機に襲われる度に、ジグザグ航進をしたため、港に引き返したり、山かげにかく

被爆惨状絵図オノオノ

「わが子よ、母が打つカンフル剤で 生きのびて！」

この場面は、原爆投下から 1 時間半ばかり経過した、城山国民学校校庭でのことでした。

山口 えみ子は、原爆によって、負傷して 救援を待っていた ときのことでした。

山口さんの母が 手熊の柿泊の家から 山越えして 城山国民学校に到着して、わが子 えみ子にカンフル注射している場面です。時刻は、昭和 20 年 8 月 9 日 午後 1 時頃の光景です。

なお、手記が別紙のとおりありますので、御紹介致します。

証言者

土 岐 えみ子 (68 歳)

長崎市 油木町

・ 当時の身分 長崎県立高女報国隊

れたり、で、いつ、長崎の港に着くか解らなかつたので、ここ柿泊、手熊、式見の人々は、皆歩いて通っていた。

当時、城山小学校の学童の多くは、疎開していたので、空いた木造の方の校舎を、大橋の兵器製作所が借りて、工場の事務の一部を疎開させていた。

県立高女学徒報国隊員として大橋工場で働いていた私は、卒業後も、戦局のなりゆきから見て、とても、勉強する状態ではなかつたので、周囲の者の進学の進めも聞かず、工場に残って報国隊として働いていた。

わたしの配属されていた給与課の一部が、城山小学校内の分工場に移されたので、自宅から学校まで、およそ十杆の山道を、毎日セッセと通っていた。

その日も、長崎へ通じる道は、リュックを背負った買出しの人々が絶え間なく来るのに出会った。帰りは、この人々は、背負えるだけの食糧を背負っ

て、又、私と行き交うのだ。長い間一滴の雨さえ降っていない道は、カラカラに乾き、落葉が足下でバリバリと、われた。

長崎の見える油木峠の近くまで来ると、サイレンが警戒警報を知らせ、間もなく、空襲警報になった。私はしばらく山かげに、身をひそめ、飛行機の音を聞き乍ら、林づたいに長崎の方向へ近づいて行った。ほどなくして、警戒警報に変わったので、城山分工場へ急いだ。

私の職場は、木造二階の東から二つめの教室で、同室の人は、皆来ていた十七才から二十四才までの十名の女子で、県立高女二名、女子商業四名、女子挺身隊四名である。

着くと、間もなく、又空襲警報になった。同室の人々と、重要書類をかかえて、鉄筋コンクリート建ての本校舎の一階へ避難した。

ラジオのニュースに耳をかたむける

うち間もなく又警戒警報に変わったので、階段を上がって自室にもどった。

十個の机は、室の中央に向き合っており、並べられ、私は中央の位置に窓を向いて座っていた。

朝から避難続きで、ろくに仕事をしていなかったのでむ中になって仕事をしていると、聞くともなく聞こえていたラジオの音が、

「敵機が一機、島原半島を西進中なり」と伝えた。

隣席の女子商のひと、

「西進なら、長崎の方向よ」

「でも一機なら、大したことはないね」

等と、話していると、やがて目の前のガラス戸越しに、飛行機が一機姿を現わした。青くすんだ空は、きらきら輝いて、とても美しかった。

「あんなに、のんきに飛んで来ると、味方も知れんよ」

「こっちの方へ近づいてきたよ」

意識に答えた。

「どうもなっとらんよ。」

一階へ降りる階段は吹き飛んで、なくなっていた。運動場側の窓の吹き取れている方の床が落ちて、少し低くなっていた。

「ここから飛びおりよう、皆わたしについて来なさいよ」

挺身隊の室長さんは、自分から先に飛んだ。皆も続いた。丁度そこにつぶれた二階の下敷きになって、女の人が助けを求めている。少し離れた所からも助けを呼ぶ声があった。それ等の声をぼんやり聞きながら私達は、一言も口を開かず、黙々と室長さんについて行った。私の体は、ふらふらと宙に浮いて、自分の意志通りに動かすことが出来なかった。

広い運動場は、がらんとして、誰もおらず、焼けつく様な太陽の光がまぶしく照りつけていた。わたくしたちは校舎にそって西側の小山の下に掘られ

と、話し合っているうちに、その飛行機から黒い点の様なものが、スーとおりて来た、と思う間もなく、太陽が十個も集って爆発したかの様な、巨大な火の塊と閃光を見た。

瞬間………。先は何も知らない。

どれ程の時が、過ぎたのだろう。

真黒闇の中から、

「神様助けて下さい」「お母さん助けて」

「神様お助け下さい」、「助けて」

の音が、かすかに聞え、だんだんはつきりして来た。

何一つ見えない暗やみの中に、私は倒れていたのだ。

空気の中に、何か、いっばいつまっていると感じた時、わたしは、本能的に息をつめて呼吸をさしひかえた。

しばらくたつうちに、ぼんやりと様子が解る様になった。机の下に倒れた者、手を合わせている者、ポカンとして座っているもの、天井も窓も机もす

た防空壕へ入った。

壕の中は、ひんやりとして、冷たかった。一番奥の三つの防空壕のつながつたあたりの、丁度運動場が見えなくて、壁になった、あたりに、わたし達は並んで座った。

誰も、口を開かなかった。少し人数が足りない様に思ったが、そのぼんやりした考えは、すぐに遠くへ消えて行った。

女子商の人が、ゲーゲーと、はき出すと、同じ様に何人も人が吐き出した。

私は呼吸が苦しくて、息を吸い込むのが、やっとだった。腕が何か変だった。どうにか、しようとして、血どろろのついた手で、ガラスの破片で切れて骨をはなれた肉をひっぱったり、丸見えの骨をもぎ取ろうとして、つかんだり、していた。じっと座っているのが苦しくて、手をついて、横になっていたが、体は、ますます、固くなつて

べて飛散して、荒れ果てた室内に変わっていた。だんだんと明るくなるにつれ、室内の様子がよく見える様になった。わたしは、声のする方へ向こうとしたが、首が動かなかった。体ごと廻そうとしたが、セメントで固められた様に動かなかった。息をつめて、しばらくじっとしていた。

「さあ、立ちなさい。皆しっかりして……わたしについて来なさい」

室長さんの声だった。満身の力を振りしぼって、私はやっと立ち上がった。

首のあたりから、どろどろと血が流れ出した。頭から流れ出した血は、上衣につき、モンペを染めた。

隣席だった女子商の人が、わたしに聞いた。

「ねえ、わたしの顔を見て……。どうか、なっとらん？」

ぼんやりした目で見ると、その顔は耳から耳へ真二つにわかれて、ぼかんと口をあけ、奥の方まで見えた。私は無

行く様であった。

しばらくすると、何人かの人が、は入って来た。「ああ」「ああ」と言い乍ら倒れる様に坐った。続いて大勢の人がドカドカと、は入って来るなり、倒れる人もあった。みるみるうちに、防空壕は一ぱいになった。女子商の人が、首をかくんと、させたかと思うとぼんやり倒れたまま、動かなくなつた。前に坐っていた、挺身隊の人は、首を両足にはさんで坐っていたが、そのままの姿勢で、土の上に、かくつとうつぶせになったまま、動かなくなつた。

四才位の男の子が、「水ば、水ば、おばちゃん、水ば」とあわれな声で叫んでいた。

「お母ちゃんに、言いなさい」言われて、すがりついた母親は、死んでいった。

「水を下さい」「水」「水」あちこちから、水を求める悲鳴が、重なり合っ

て聞こえた。それ等の声は、せまい防空壕の中に、こだまし、充滿した。

「苦しい、殺して下さい、早く殺して」、女の人の声だった。その間にもどんだん人の数は、ふえてゆき、死体の上に、又、未だ生きて、瀕死の人の上に重なっていった。

私は、だんだんと、目が見えなくな

って行き、その内に、周囲の声も細くなって、意識が遠くうすれて行き、やがて、何もわからなくなってしまうた。

どれ程か、時が過ぎた。
私は暗い世界をさまよっていた。果てしなく続く暗闇の中を、一人で、さまよいて歩いていた。と、誰かが、わたしの名を呼んでいる様に思えた。ほんやりした意識の中に、はいつて来るその声は、母の声の様であった。少しづつ気がついて行く私の耳に、今度はたしかに母の声だった。満身の力を振りしぼって、

何回か同じ動作をくり返すうちにやがて起き上がらなくなった。

すぐ横で、女の先生らしい人が助けを求めている。

「校長先生、助けて下さい。薄情だねえ、校長先生は……。助けて下さい。」
頻りに、飛行機が一機、二機と、爆音を立てて、私の上を飛んで行った。それ等は、あの大きな光の塊を持って来た飛行機の来た方向から、飛んで来るのだった。

私は防空壕に、もどらなければ、と思つた。けれど、立つことも、はうことも、出来なかった。

壕の入口を見ると、倒れた人々であふれていた。あの重なり合った死体の山を、乗り越えて、一人で、もとの場所にもどることは、とても出来そうになかった。

暑い真夏の陽が、容赦なく私の体を焼いていくうちに、いつか、又、意識

「ハイ」と答えた。

気がつくくと、私の周囲の人は、皆倒れている、も早、悲痛な叫びもなかった。

もう防空壕の中は、身動きも出来ぬ人で、埋っていた。その多くは、人の下や上に、重なり乍ら、むくろとなっていた。

母が死体を乗り越えて、私のそばに来て、助け起こした。せまい壕の中は血のおいと、人々の吐いた、異様な悪臭のする吐物の臭いとで一ぱいだった。

やっと外へ出て見ると、校舎はつぶれ、運動場のそこ、ここに、死体が散乱していた。はだかの人、黒こげの人。

母は、自分の上衣を脱いで、防空壕の前に爆風よけに山高く積まれた土の斜面に敷いた。

「ここに、横になりなさい。」
そう言つて、持って来た水筒の水を

が遠くなくなっていった。

ガヤガヤとさわぐ声に気がついて見ると、屈強な男の人達が、私を取囲り

んでいた。タンカが来たのだ。母が私の上にしゃがみ込んで注射をしていた日は、すでに西に傾き、焼熱の日は終わろうとしていた。私達の他に動いてるものとしては、何もなかった。

と、突然、静寂を破って、護国神社の境内から声がした。

「生きている人は、皆ここに集まって下さい。」メガホンを持った男の人が、ゆっくりと、大きな声で叫んでいた。四方に向きを変え乍ら、廃虚の町に向つて何回も叫んだ。うすくらやみの中に黒い影をはっきり浮き立たせてその声は、強く、たくましい響いた。「生きている人は、皆ここに集まって下さい。」

一瞬に焼土と化した瓦礫の町に、どこまでも響いて行つた。

飲ませようとした。中は、からっぽで一滴の水もなかった。皆途中で、苦しむ人々に与えてしまったのだ。救急袋の中から注射器を出すと、私の腕に強心剤を打った。しばらくじっと、私の顔を見つめていてからいった。

「一度、家に帰つて、タンカをつれて来るからね。ここにじっとして、おりなさいよ。動いてはダメよ。すぐ来るからね。」そういうなり走り去って行った。

真夏の太陽は、容赦なく大地に輝りつけ、生きものの、すべての生命を、うばう様であった。

運動場の中程の所を、黒い瓦を持った八才位の男の子が歩き廻っていたが立ち止まって、瓦を土の上に置き、頭に敷いて横になった。しばらくするとむっくり起き上がり、瓦を持って、又歩き廻った。男の子は、はだかで、焼けて皮膚がむけ、赤い真皮が出ていた。黒い瓦は、陽の光を反射して、時

荒川附記

1 七月にはいつて、米機B29の空襲が頻繁になったため、児童の毎日登校を止めて、各町で隣組別に一年から六年までを一ヶ所に集めて、父母指導のもとに学習する「隣組学習」にうつった。

学校の三階の六教室と、二階の六教室に、三菱兵器製作所(給与課)が移転し使用していた。

(原子爆弾災害調査報告書、第2表、第3表、参照)

2 「土岐恵美子(旧姓山口)さんの、職務しておられた教室は、南側鉄筋三階建校舎(現二階建)二階の東側から四室目(現三室目)でした。(原子爆弾災害調査報告書、第2表、第3表、参照)

3 学校の防空壕は、運動場の西側にあり「コの字」を二つ重ねた形に、兵器製作所が当校に移転してきてから、斜め横から掘りつないだ一五〇人はらくに収容できる大きさであった。

(原子爆弾災害調査、第五回横穴式防空壕参照)



被災惨状絵図 ㊦ ㊧

「私はこのようにして救助された」

この画面は、原爆投下されてから数時間後、私の母が、
柿泊に帰り、娘が城山国民国民学校において半死半生
で生き残っているのを村人にタンカによる救出を依頼
した。その際、父親は、出征していたので、村の有力者
に頼むより方法がなかった。

そのときは、長崎市より、逃げて来る人は多数あったが、
長崎に向う人はなかったのです。

時限爆弾が、爆発するとの情報で、村民はみなさん、こわ
がっていたのです。

私の母の必死のお頼みに、7、8名の元気な人が、母と
同行することとなった。

それは、かねてから、村にひとりの医者で、村民に感謝
されていたからか、或いは村特有の助け合いであったかも
知れません。城山国民学校に到着したのは、昭和20年
8月9日午後7時前で、薄暗くなっていた。先づ母が私に
カンフル注射を一本打って、それからタンカに乗せられたのです。

そのとき城山国民学校で生きていたのは、私ひとりだっ
たと思います。あの油木の七曲りを通る頃には、
真暗くなっておりました。